2006 年度

青年期における時間的態度が自我同一性及び離人感に及ぼす影響について

立命館大学応用人間科学研究科
臨床心理学領域
山本　輝栄

今回の研究では、自我同一性と離人感との関連を明らかにし、さらに、時間的態度が自我同一性及び離人感に及ぼす影響があるかを明らかにすることとする。本研究の仮説としては、①『自我同一性と離人感との間に関連がある。』②『時間的態度が否定的な者は、肯定的な者よりも、自我同一性が拡散状態にある。』③『時間的態度が否定的な者は、肯定的な者よりも、離人感を呈している。』とする。

方法としては、時間的展望体験尺度、多次元自我同一性尺度、そして離人傾向尺度を使用し、関西のＯ高等学校とＲ大学に通う生徒に対して質問紙調査を行った。そして、それぞれを因子ごとに分類し、分析を行った。離人傾向尺度については、今回筆者自ら因子分析を行い検討した。その結果、2 因子が抽出され、それぞれを『意味感の喪失』と『知覚の能動性の欠如』とした。

次に、多次元自我同一性尺度におけるそれぞれの因子と離人傾向尺度におけるそれぞれの因子との相関を求めた。今回の結果では、自我同一性における自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性が確立されていないほど、意味感の喪失が見られることが示唆され、自己斉一性・連続性、心理社会的同一性が確立されていないほど、知覚の能動性の欠如が見られることが示された。本研究の『自我同一性と離人感との間には関連があるのではないか』という仮説が検証されたと言えよう。

次に、時間的態度が自我同一性に及ぼす影響について検討するために、時間的展望体験尺度各因子高群・低群で多次元自我同一性尺度の得点を比較した。その結果、現在、過去受容、そして希望に対して否定的な感情評価を持っている者は肯定的な感情評価を持っている者に比べて、自我同一性が拡散状態にあることが示唆され、目標指向性については、否定的な感情評価を持っている者は肯定的な感情評価を持っている者に比べて、自我同一性の中における対自的同一性と心理社会的同一性が確立されていないことが示唆された。これは、本研究の『時間的態度が否定的な者は、肯定的な者よりも、自我同一性が拡散状態にある。』という仮説を検証する結果となった。

最後に、時間的態度が離人感に及ぼす影響について検討するために、時間的展望体験尺度各因子高群・低群で離人傾向尺度の得点を比較した。その結果、現在、過去受容、そして希望に対して否定的な感情評価を持っている者は肯定的な感情評価を持っている者に比べて、離人感における意味感の喪失があることが示唆され、目標指向性についてはその影響が見られなかった。また時間的態度が離人感における知覚の能動性の欠如に及ぼす影響も今回は、見られなかった。意味感の喪失のみを取り出して離人感と呼ぶことは少し困難なように思える。よって本研究の『時間的態度が否定的な者は、肯定的な者よりも、離人感を呈している。』という仮説については十分に検証されなかったと言える。